

寄稿

長岡社長と私

「社長のブログ・プラスエム春夏秋冬」
を読んで

特定非営利活動法人教育情報プロジェクト代表
元日本英語検定協会専務理事

大釜 茂璋

長岡社長と私

「社長のブログ・プラスエム春夏秋冬」を読んで

大釜 茂璋

長岡社長とは旺文社で同じ釜の飯を食った仲間である。もう40年も昔のことになる。教育出版として知られるこの会社で、新しく事業部門として立ち上げた事業局事業課員だった。仕事内容は出版以外の関連事業を主要業務とするものだったが、局としては「旺文社模試」なども実施していたが、事業課の仕事は、当時まさに受験界を席卷していた文化放送の大学受験ラジオ講座の聴取者を組織化した、たしか「旺文社受験サークル」と呼んでいたと思うが、英数国の通信添削や機関誌の発行、受験生からの様々な質問への対応などだった。

それとともに事業課の業務として、当時は「全国学芸コンクール」（現在の全国学芸科学コンクール）と呼んでいたが、全国の中・高校生から自由研究部門を初め、書道、絵画、彫刻、詩、短歌、俳句など色々な分野の作品を募集し、優秀作品には内閣総理大臣賞などを授与して奨励するコンクールも担当していた。

群馬県から上京し、社会人一年生としての初々しさが抜け切れぬ長岡君が配属されたセクションは、意気に燃える若者たちの、そんな新しい課だったのである。コンクールは募集締切りが近づくと、応募作品が殺到してとても担当課員の一人や二人では処理できず、課員総がかりで半徹夜の仕事だった。長岡君は彫刻・彫塑の朝倉文夫賞を担当したが、この部門の最終審査員は朝倉響子先生だった。

一方受験サークルで長岡君は数学を担当した。大学受験生を対象にした数学となれば、おいそれと誰もが太刀打ちできるものではない。添削指導のできる現役の高校教師を探して添削の仕事に依頼するとともに、場合によっては、数学を話題にした話し相手を務めなければならないこともある。添削が不十分と思われる指導にはその部分を指摘して、添削のし直しを要求することも大事な仕事となる。私のように数学に疎い者にはとても務まらない仕事だ。しかし彼は淡々とその仕事をこなし、添削をしてくださる先生とはすっかりうち解け仲良くなり、楽しそうに処理していた。

仲良くなるといえば、彼は仕事を通じて接触する先生には、全国学芸コンクールでも数学の仕事でも、それぞれの先生方にはとても可愛がられた。朝倉響子先生にも格別に目をかけられていたし、数学の先生とは何回も食事に呼ばれるなど、予期以上の仕事を成し遂げて課の中で一日置かれたものである。担当の先生に可愛がられるということは、それだけ信頼される対応をしたということであり、審査や添削を担当して下さる先生にしても、親身に熱を込めて仕事を仕上げてくれることになる。

長岡君はその後旺文社の広告局に異動し、私も後を追うように同じ局に異動した。広告局員として彼は、持ち前のバイタリティーと企画力で、次々と仕事を拡大していくことになる。新しく仕事を企画しては、新しいクライアントを発掘し、その頼もしい仕事ぶりは今でも鮮やかに私の脳裏に残る。

人に好かれ、それによって信頼を得るということは、その人独特の能力に左右されるものではあるが、長岡君の場合、格別に愛想がいいわけでもないし、かといって人にお世辞を言うわけでもない。これは本人も認めるところではあるが、なかなかの頑固者の一面も持ち合わせ、これと思ったら梃子でも動かない一刻な面すら合わせ持つ。しかし接する相手にはことごとく好かれ、可愛がられる。そしていつの間にか確かな信頼を得ている。これは紛れもなく彼一流の才能と言っていい。

プラスエムの創立10年を記念して、ここ数年、“社長のブログ”として続けてきたものを一冊にまとめてみようと思う、と長岡社長が言う。ブログを始めたということは当初から聞いていたし、私も時々覗いて知ってはいたが、彼のその日体験したこと、気づいたこと、あるいはプラスエム運営過程の熱い思い、これからのあり方などを、企業経営の責任者としての強い志に接したものだ。ときには家族への深い愛情を語り、特に二人のお子さんにたいする父親としての愛情をブログに託し、この分野に関しては不器用なまでの表現でありながら読む人に迫ってくる。

それはプラスエムの社員にたいしても同じ思いで触れている。彼の心優しい思いや行為はブログの各所に滲み出てくる。企業の運営は社長一人では不可能であることを彼もかつて企業の一員であっただけに、よく知っている。社員は歯車の一つであるとともに機械を動かすエンジンであることを強く意識している。歯車一つ欠けてしまえば、エンジンが勢いよく唸りをあげても

機械が動かないことをブログの各所で示唆している。油が切れたら、そこに潤滑油としての社長の愛情を注入してやらなければならないことを知っている。

触れることが前後になってしまったが、長岡社長は高校時代、先に述べた旺文社の全国学芸コンクールの作文部門で、高校生の部佳作第一位に入選している。昭和44年か45年頃のコンクールだったと思う。偶然にも私が整理していた作品の中にその一編はあった。タイトルは忘れたが、高校生らしい逞しい正義感に乗せた、素直で端正な文章だなどの思いで読んだ記憶がある。彼の文章は今でもその時の瑞々しさを失うことなく、溢れるような正義感をパソコンのキーボードに乗せて叩いている。

平成21年11月、彼は母親の死に遭遇した。兄一人、姉一人の三人兄妹の末っ子として生を得た長岡社長は、本人はそうじゃないと強がりと言うが、特に母親にはかなり甘えながら育ったことは間違いない。末っ子となれば、男も女も区別なく、大いに甘えて育つもの。いくら本人が否定してもそれはその人の言動に現れる。

群馬の地方料理に“お切り込み”があるという。山梨の“おほうとう”は、生のうどんとカボチャなどの野菜を味噌で煮込んだ鍋料理だが、懐かしそうに話す彼の“お切り込み”もこれによく似ている感じがした。寒い夜、母親のつくる“お切り込み”を家族で食べる味や雰囲気懐かしかったのだろう、一緒に居酒屋などで飲むとき彼は、よく“お切り込み”の話をした。何回も聞かされた。そんなときは、湯気の立つ鍋の向こうの優しい母親の姿を、じんわり思い浮かべていたのかも知れない。その頃の彼の母親はまだまだ元気だった。

母親が倒れて入院して大変だった頃、大学を卒業して就職が決まった娘の麻衣さんの、赴任地の浜松への引っ越しと重なってしまった。息子であり、娘の父親である長岡君は、娘の荷物運搬と、群馬県富岡市の病院に入院している母親のお見舞いのために、900キロの行程を一日で走り廻っている。子を思い、親を思う、父親としての心情が痛いほどに伝わってくる。

「親不孝のかたまりのようだった私」と彼は書いているが、子どもなんていうものはみんなそういうものだろう。年齢や地位などには関わりなく、誰でもそれだけ親に甘えているのであり、親も喜んでその境遇を甘受する。まして末っ子の男の子。母親にとってわが子が可愛くなくてどうする。お母さ

んから見れば、つっけんどんな素振りをしてはいるが、息子が甘えていることなどは百も承知。むしろ嬉しかったと思う。今まさに長岡社長の二人の子ども、まったく同じ素振りを取りながら親の存在を意識しているのだ。

脳梗塞で倒れる前の日に、珍しく母親から息子宛に電話が入っている。どことなく気になる電話に「何かあった？」と聞く息子。「特にない」と答えて「会社はだいじょうぶなのか？」と聞いてきたのだ。常に息子を気にかけているだけでなく、その仕事がうまくいっているかどうか、母は心を痛めていたに違いない。末っ子の息子を心配する母親の情愛は、単なる情緒感を超越している。そしてその翌日倒れるのである。

プラスエムの仕事は、そのすべてが人を直接相手にすることが多いだけに、気を遣って余りある。そういうこともあってとにかく忙しい。クライアントの思いを汲み、サポートする事業の二歩も三歩も先を読み取りながら企画を練り、それらの達成に向けて努力を重ねる。従って社員もじつに良く働く。当然社長は社員以上に忙しい。

その合間を縫って彼は、母親の入院先には頻繁に顔を出している。上信越自動車道から富岡のインターを降りると見えてくる建物。「あの建物の中に母がいる。意識がなくとも触れれば温かい母が息をしている」と思える幸せ、と彼は書く。お母さんは死んではいない。奇跡と言うことは本当にあるんだからと、私は何回もその奇跡を信じていいと彼にはメールで激励をしたものだ。

少しでも病気の母の傍にいたいという気持ちは、母を慕う末っ子の素直な気持ちの顕れである。うっすらと目を開けることもあるが、こんこんと眠る母親には、元気な頃には当たり前だった我が儘や生意気を言うこともできない。引き寄せた椅子に座って、病室の壁に掛かった絵をぼうっと眺めたり、眠る母親のおでこに自分の手を当ててみては、生きている証拠としての温かさを確かめたりするだけだ。しかしそれは彼にとって、何ものにも代えがたい特別の時間だったのである。ブログを何回か読み返すうち、私にとってもこのシーンに差し掛かると熱いものが込み上げ、溢れる涙を抑えることができなかった。

そして10月26日、ついに帰らぬ人となったのである。この日は長岡君の誕

生日である。5月11日に倒れて以来5か月にも渉る闘病に耐え、母は生き続けて末っ子の生まれた日に逝ったのである。それはただ生死の境を彷徨っていた母ではなかった。倒れる前日に「会社はどうか」と気にかけてくれたということは、母は人としての頑張る姿を、身をもって教えてくれたものに違いない。

旅立つ日の母の顔は、薄化粧が施され、苦しみから解放されて穏やかな顔だったとブログにはある。

プラスエムは学校と社会、そして各種企業とのジョイント役として、わが国の教育のクォーリティーを高めるところに、確たる存在の意義がある。「がんばる先生を応援する！」をモットーに、長岡社長の経験、知識、創造力をエンジンにして、社員はもちろんプラスエムを取り巻く人々の力をも結集し、教育基盤の構築に寄与していく。

創立10周年を迎えるにあたり、着々とその地歩を固めつつあることは誰もが認めるところである。長岡君のお母さんから見れば、甘えん坊の末っ子である息子の成長していく姿を、プラスエムの発展を通してしっかり見ているに違いない。

2010.01.05